

双子葉植物合弁花類スイカズラ科

エゾヒョウタンボク

青森県：A

環境庁：絶滅危惧ⅠB類



細井幸兵衛撮影

齋藤

本州北部に分布する、高さ2~3mの落葉低木で、本県ではきわめて珍しい植物です。対生する葉の根元から長さ2~4cmの柄を出し、その先端に淡黄緑色又は帯紅色の花を2個つけます。ヒョウタンボクという名前は、2個の果実（液果）がくっついていて、まるでヒョウタンのように見えることからつけられましたが、本種の果実は2個が半分以上融合しているため1個のように見えます。

双子葉植物合弁花類スイカズラ科

ベニバナヒョウタンボク

青森県：B

環境庁：絶滅危惧Ⅱ類



細井幸兵衛撮影

細井

従来、北海道・南樺太・南千島が分布域でしたが、八甲田山域にも分布が確認されました。ここでは風衝地にあるので樹高が1m以下と低いが、北海道では2~3mに達します。その後山形県でも見つけたので、本州に産地が2か所確認されたこととなります。他の植物の分布に比べるとほんとうに不思議な分布です。

本県に産するヒョウタンボクの中で紅花なのは他にないので花をみればすぐ分かります。

双子葉植物合弁花類オミナエシ科

カノコソウ

青森県：C
環境庁：該当なし



細井幸兵衛撮影

木 村

草丈60cmほどで、オミナエシ状の花をつける多年草です。葉は羽状で対生し、茎の上部には淡紅色花を咲かせます。

北海道から九州まで分布しています。県内では小泊村など、限られた地域だけで見られています。

やや湿った草地に生育していますが、株数は多くありません。

近年、周辺地が整備されるなど、環境変化が見られます。生育地全体の保全が望まれます。

別名はハルオミナエシ(春女郎花)です。

双子葉植物合弁花類キキョウ科

キキョウ



兼平瑞夫撮影

齋 藤

青森県：B
環境庁：絶滅危惧Ⅱ類

日当たりの良い、乾いた草原を好む多年草です。昔は山野に普通に見られた植物ですが、今では非常に珍しくなりました。茎の先端は分岐することがあり、8月から9月頃にそれぞれの先に直径4~5cmの鮮やかな花を咲かせます。まれに白い花のものも観察できます。本種は雄しべ先熟の代表的な植物として知られていて、雄しべが熟して花粉を出している間は雌しべは熟しておらず、雄しべが枯れた後に雌しべが熟します。

双子葉植物合弁花類キク科

ホロマンノコギリソウ



根市益三撮影

青森県：C

環境庁：絶滅危惧Ⅱ類

海岸の湿地に生える多年草。花は白色から淡紅色まで変化があります。頭花の径は10～15mm、舌状花は6～8個。長さ6～8mmでノコギリソウより数が多くて長いとされていますが、変化があるので詳しく調べる必要があります。

写真には花の大きいエゾノコギリソウ（写真：中央下）が混生しています。

北海道・本州中部以北に分布し、県内の全域に見られますが、海岸開発などで減少しつつあります。

別名キタノコギリソウです。

原子

双子葉植物合弁花類キク科

オニオトコヨモギ

青森県：B

環境庁：絶滅危惧Ⅱ類



細井幸兵衛撮影

大間町弁天島で採集された標本により新種として発表されたヨモギの1種です。大間町・佐井村海岸の岩石地にも分布していますが、対岸の津軽半島にはありません。北海道では渡島半島の日本海側や津軽海峡側にもあり、本県より広い分布です。

ハマオトコヨモギを大きくしたような感じがします。その根出葉は初め白い毛で覆われていますが成葉になると毛が薄くなります。葉の裂片の形には個体差があります。

細井

双子葉植物合弁花類キク科

ミチノクヤマタバコ



根市益三撮影

青森県：C

環境庁：該当なし

草地に生える多年草。全体粉白色を帯び、根出葉は栽培されているタバコの葉に似ています。舌状花が2～3個で、6月に花が咲きます。

関東北部から東北地方の太平洋側に分布し、八戸市が北限です。かつては階上町から八戸市までの海岸草地に数か所の生育地がありましたが、海岸開発などにより半減しています。残った所も樹木やオオイタドリなどの競合植物を除去してやらないと影響がでできます。

根 市

双子葉植物合弁花類キク科

ヒメヒゴタイ



根市益三撮影

青森県：A

環境庁：絶滅危惧Ⅱ類

草丈1mほどの多年草で、アザミを思わせる姿をしています。直立した茎の上部に多数の紅紫色の頭花を密集させ、よく目立ちます。総苞片の先端に、円い膜質紫色の付属物があるのが大きな特徴です。

北海道から九州まで分布しています。県内では各地の向陽山地草原で記録されていますが、まれにしか確認できません。

近年、山地草原が減少しているので、絶滅が危惧されます。

よく日が当たる山地草原の生育地確保が望まれます。

木 村

単子葉植物オモダカ科

アギナシ

青森県：B

環境庁：絶滅危惧Ⅱ類



木村啓撮影

草丈60cmの多年草で、長い柄を持ったハサミ形の葉を根際から伸ばします。花は白色3弁花で長い花柄の上部に円錐状につけます。

北海道から九州まで分布しています。県内での分布範囲は全域です。

良く似たオモダカやホンバオモダカは普通に見られますが本種はきわめてまれにしか見られません。

葉先が円頭で葉の付け根にたくさんの小塊茎を抱えているのが本種です。

生育地となる田んぼや溝などの環境保全が望まれます。

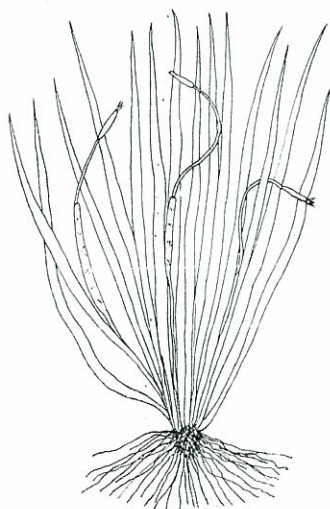
木村

単子葉植物トチカガミ科

マルミスブタ

青森県：B

環境庁：絶滅危惧Ⅱ類



水田地帯の水底の泥土上に生える1年草で、県内の記録は少なく、西津軽郡と弘前付近の記録が残っています。

そのほか、近年では青森市、車力村で確認されているようです。

農薬の使用が及ばないような自生環境の水湿地に生き延びている可能性があります。詳細については不明です。

図は、昭和30年代に画かれたもので、特徴を良く表しています。

弘前付近の水辺・水中植物譜（鈴木正雄 1978）

細井

単子葉植物ホロムイソウ科

オオシバナ (マルミノシバナ)

青森県：C

環境庁：絶滅危惧Ⅱ類



根市益三撮影

塩湿地に生える多年草。茎は高さ15~50cm。果実は楕円形で長さ3~5mmです。似ているホンバノシバナの果実は細長く約9mmです。

北海道と本州の関東以北に分布し、県内ではやや普通に見られ、太平洋側の尾駱沼・鷹架沼・高瀬川河口部に群生地があります。

平坦な砂泥地や岩間の満潮時冠水する辺りに生育して株状となり、後方ではヒメキンボウゲなど混生します。群生地を見ると危機感がわいてきませんが、海岸開発で減少が進んでいます。

根 市

単子葉植物ホロムイソウ科

ホンバノシバナ

青森県：A

環境庁：絶滅危惧Ⅱ類



左：オオシバナ 右：ホンバノシバナ

根市益三撮影

湿原に生える多年草。葉は細くて幅約1mm。果実は線形で長さ約9mmです。似た種類のオオシバナ(マルミノシバナともいいます)の果実は長楕円形で長さ3~5mmです。

北海道・本州(北・中部)に分布し、県内では八甲田山および海岸・湖沼周辺の湿原に見られます。高瀬川河口の塩湿地などではオオシバナと混生することもあります。海岸部では湿原開発により消滅した所もでてきています。

根 市

単子葉植物ヒルムシロ科

ササエビモ



細井幸兵衛所蔵

青森県：D

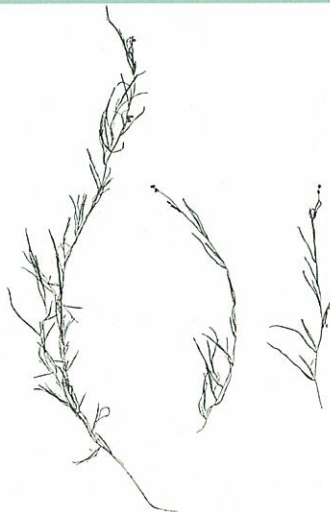
環境庁：絶滅危惧ⅠB類

完全な沈水生で浮葉は出さず、花が咲いても結実しないとされています。エゾノヒルムシロとヒロハノエビモの雑種なので結実しないのではないかとの意見もあります。県内では十和田湖と小川原湖に記録されていますが、詳しいことは分かっていませんので、今後とも調査研究の余地が充分あります。エゾノヒルムシロは県内には広く分布していますが、ヒロハノエビモは津軽地方や下北地方には少ないようです。

細井

単子葉植物ヒルムシロ科

ツツイトモ



細井幸兵衛所蔵

青森県：A

環境庁：絶滅危惧ⅠA類

全国的に分布しますが産地はきわめて少ないです。国内で初めて分布が確認された時には、十三湖と小川原湖倉内産の標本が引用されており、この地域には現在でも分布しています。

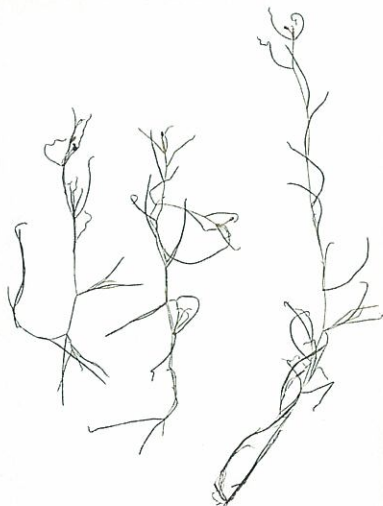
海と連絡している、いわゆる汽水域を好むようです。

内陸の池沼や川に生えるイトモによく似ていますが、本種は葉の基部の托葉（たすきば）が筒状になり、花序が少し離れて2段に着きますので区別ができます。

細井

単子葉植物ヒルムシロ科

イトモ



細井幸兵衛所蔵

青森県：A
環境庁：絶滅危惧II類

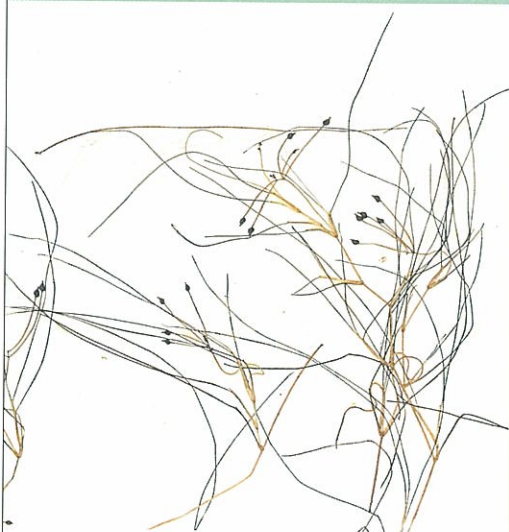
池や水中に普通に見られる多年草で、水中茎はよく分枝して、枝の先が不完全な殖芽となっています。葉の長さは2~4cmで、幅0.7~1.2mmです。花期は6~8月です。

北海道・本州・四国・九州に広く分布していて、本県でも全域に分布していますが、水田地帯では減少しているようです。

原 子

単子葉植物ヒルムシロ科

カワツルモ



細井幸兵衛所蔵

青森県：A
環境庁：絶滅危惧I B類

海岸で海水の飛沫が混入するような水溜まり(タイドプール)に生えます。

県内の分布域は限られていて、八戸市と階上町でだけ確認されていましたがその後は、階上町では絶滅してしまったようです。

世界中に分布するといわれていますが、国内の産地は激減しており、環境庁の試算では2020年の絶滅率は85%とされています。

常に水中にあって、線状の葉で海辺の水溜まりに生えているものは他にありません。

細 井

単子葉植物ヒルムシロ科

イトクズモ



細井幸兵衛所蔵

細井

青森県：B

環境庁：絶滅危惧II類

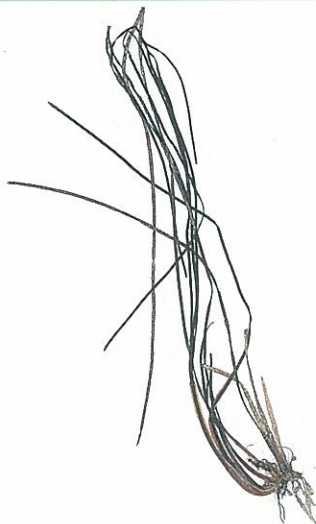
海岸近くの汽水域に生育し、全世界に分布すると解説されていますが、国内では開発と農薬汚染で減少しているといわれています。

県内では六ヶ所村尾駱沼、鷹架沼、小川原湖内沼、十三湖近くの前瀧の記録があります。十三湖と周辺の日本海側についてはよく分かっていません。

完全な沈水植物で開花受粉も水中で行われるそうです。果実は三日月状で葉腋に直接着くのでミカツキイトモの別名があります。

単子葉植物アマモ科

スゲアマモ



細井幸兵衛所蔵

細井

青森県：D

環境庁：準絶滅危惧

海中の砂泥地に生えるアマモの一種で、アマモは地下茎（かじると甘い）の節が離れて葉束をつけるのに、本種は節間が短くて束生します。

1932年に新種として記録された時には、野辺地町の標本が使われています。

海中の砂泥に沈んで生えていて、陸生植物より目に付きにくいので、植物調査記録にもなかなか出てきませんが、こういった海中の顕花植物にも注意を払いたいものです。

単子葉植物イバラモ科

ヒロハトリゲモ (サガミトリゲモ)

青森県：D

環境庁：絶滅危惧ⅠB類



細井幸兵衛所蔵

細井

本県での記録は、八戸市売市の水田で採集されたものがあるだけで、本州北限の記録にあたります。種子は曲がらず、表面模様がほぼ四角で大きく、葉鞘の先はとがりません。

三八地方から上北郡の太平洋側の池沼群の水生动植物は詳しく調査されていないので注意する必要があります。

環境庁では別名のサガミトリゲモという和名を使っています。

単子葉植物イバラモ科

イトトリゲモ

青森県：A

環境庁：絶滅危惧ⅠB類



細井幸兵衛所蔵

細井

全国的に広く分布していましたが、農薬汚染で水田地帯は激減してしまいました。本県では広く記録されていますが、今では滅多に見られません。

本種はトリゲモ類の中では最も細く繊細な葉を持ち、種子が2個並んで付くことが特徴とされています。

1935年に東通村・八戸市・青森市・弘前市・十三湖の標本が「種子表面の模様はやや短冊状に縦長で、葉鞘の先は円頭状に突き出ている」と説明された例があります。